古代形容詞の語幹について

麻生朝道

古代において形容詞の語幹は語尾を伴はずそれだけの形でいろ〳〵に用ゐられた。語幹といふ概念は語尾の存在、即ち形容詞の成立を前提とするものであつて、その意味では語幹は語でなく、明らかに語の構成要素である。しかしすべての古代形容詞の研究は、語幹時代を想定して語幹を形容詞成立以前のものとし、古代における語幹の單独の用法をその名残りとしてゐる。その場合所謂語幹は語幹でなく、語尾を予想しないものである筈である。

私は形容詞の成立を発生的に考察するためにも、又形容詞の構造を機能的に考察するためにも、所謂語幹の單独の用法を見究めることが先づ必要であると思ふ。

一、所謂ク活形容詞の語幹の用法

所謂ク活形容詞の語幹は語尾を伴はずに次のやうに用ゐられる。

A、連体修飾語的に使はれる例

安可胡麻（万葉集　以下この註に従ふ　十四、三五三四）安良我伎（十四、三五六一）阿乎宇奈波良（二十、四五一四）於保伎美（十四、三四八〇）久路加美（二十、四三三一）之良久毛（十七、四〇〇六）之路多倍（十五、三七五一）須久奈比古奈野神代（十八、四一〇六）多可禰（十四、三三五八）刀其已呂（二十、四四七九）那我古飛（五、八六四）敷刀能里等其等（十七、四〇三一）布流久佐（十四、三四五二）夜須伊（十五、三六三三）和可麻都（十四、三四九五）

B、連用修飾語的に使はれる例

伊多那加婆（記、八四）登保志呂之（三、三二四）波也美武（十五、三七二〇）布刀之利多弖（二十、四四六五）多迦比迦流　比能美古（記、二九）

C、述語的に使はれる例

(1) 加座幡夜能（三、四三四）宇知斯淤富泥　泥士漏能（記、六二）毛毛那賀爾（記、四）波毘呂由都麻都婆岐（記、一〇二）宇良夜須爾（十四、三五〇四）腰細爾（十六、三七九一）

(2) 己之心柄於曾也。是君（九、一七四一）痛。怜。怜布当乃原　甚。貴大宮処（六、一〇五〇）大醜此云鞅。奈。瀾儷勾（神武紀）

右にあげたやうにク活形容詞の語幹は連体修飾語的の多くの用法と共に一部連用修飾語的及び述語的に用ゐられてゐる。しかしそれらはC(2)の場合を除けば何れも複合語の要素となつたもので単語を作る造語的用法と言ふべきである。即ち安可胡。麻、安良我。伎、刀其。己呂と次に来る語が連濁になつたり、加座。曙夜の如くゼがザと変化することなどの音韻現象がこれを証明してゐる。

C(2)の場合であるが、その中の於曾也については次のDに於て説明する。痛。怜。怜については訓に、アナアハレ説（略解）、アナタヌシ説（攷証）、アナオモシロ説（古義）等があり、甚貴にはアナタフト説（略解）、イトタフト説（古義）等があるが、神武紀の鞅。奈。瀾儷勾の用例にもあるやうに

感動詞　＋　形容詞語幹

の形のあつたことは考へられる。山田孝雄博士は「上に『アナ』『アヤ』といふ感動副詞ありて形容詞の語幹のまゝで敍述するのは古語の例である。」（芸林二ノ二）とされるが、感動を表現する時形容詞の意義素である語幹（意味的に完結体である所謂語幹）が体言的に使用され、博士のいはゆる未開展の句となつたものである。

D、助詞に続くとされる例

(1) (a) 佐夜。爾。（十四、三四〇二）之気。爾。（十八、四〇五一）由多。爾。（十二、二八六七）

(b) 伊也等保。爾。国乎伎波奈礼　伊夜多可。爾。山乎故要須疑（二十、四三九八）伊夜等保。奈。我。爾。（十八、四〇九八）

(2) 伊多。母。為便無見（十三、三三二九）伴也。母。許奴可登（十五、三六四五）

(3) (a) 於曾。能。風流士（二、一二六）等保。能。美可等（十八、四一一三）安乎。能。宇良（十八、四〇九三）夜洲。能。河波（十八、四一二五）

(b) 等保追。可牟於夜（十八、四〇九六）深津。島山（十一、二四二三）

E、助動詞に続くとされる例

伊麻宇多婆　余良。斯。（記、十一）

さて右の諸例を検討してみよう。

(1) (a) サヤニは

勢奈能我素低母　佐夜。爾。布良思都（十四、三四〇二）伊波奈流伊毛波　佐夜。爾。美毛加母（二十、四四二三）波流流弊等佐夜。爾。奈里奴礼婆（二十、四四三四）

と何れもニと共に副詞となつてゐる。又

伎美我宇倍波　佐夜加。爾。伎吉都（二十、四四七四）

とサヤカニともなるが、カをとるのは形容的意味の表現力を強めるためについたもので、カによつて詞としての機能が増大する。サヤだけでは語として極めて独立性に乏しいと言はねばならぬ。

シゲニは

許能久礼　之気。爾。（十八、四〇五一）櫻花　木晩茂。爾。（三、二五七）

の用例の示すやうに述語格に立つてゐるが

敷治奈美乃　志気里波須疑奴（十九、四二一〇）

のやうに動詞としての活用があるので動詞の語幹シゲにニがついた副詞と見るべきで、体言シゲにニがついたものではない。

ユタニは

大舟之　由多爾將有　人児由惠爾（十一、二三六七）其夜者由多爾　有益物乎（十二、二八六七）安齊可我多　志保悲乃　由多爾　於毛敝良婆（十四、三五〇三）

と何れも副詞として用ゐられてゐる。即ちユタだけを体言とした例は存しない。

右のサヤニ、ユタニが形容詞となる時は

河見者　左夜気久　清之（十二、三二三四）

海原乃由多気伎　見都都（二十、四三六二）

と語根に「気」をとりその後に語尾がついてゐる。即ちサヤ、ユタはケ（気）をとつて始めて語幹となるのであつて、それだけでは詞としての独立性がない事を示してゐる。

(1)(b)に属する語はイヤを伴つてゐて、「――ニ」だけの形では使はれない。即ち

イヤ　＋　形容詞語幹　＋　ニ

と慣用語句となるのでC(2)にもふれた通り、トホ、タカ、ナガだけを独立の単語とする事は出来ない。

(2)イタとハヤとはBの例が造語要素となつてゐるのと異なり、モをとつて連用修飾格の文節となつてゐる。即ち語幹が主体の感動を表現するためにとつたのが助詞モであるが、（助詞モは軽い感動を表す）しかしイタもハヤもモと慣用的に連語となつてゐて、それ自身独立の詞ではない。

於伎都加是　伊多久　布伎勢婆（十五、三六一六）

烏梅能半奈　半也久　奈知利曾（五、八四九）

と語尾をとつて始めて自立語となるのであつて、モをとる例はC(2)、D(1)(b)と共に語幹の特別な用法である。

(3)於曾はC(2)にもあげた通り「也」に続く事もあり体言に近いと思はれる。等保はイヤトホニとも熟し、ノ、ツ、ニの助詞に続くから文節を作る体言に近いが、他の助詞に連る事がなく又、助詞なしではAの場合のやうに複合してしまつて独立性に乏しい。等保伎美与（二十、四三六〇）と語尾をとつて始めて自立語となる事が出来る。安乎、夜洲、深の諸例は地名で、地名に古語が残る事実は考ふべきであるが、他の助詞につかないから体言として自由に用ゐられたとは言ひきれないのである。

E、形容詞の語幹に助動詞が連つたといはれるのはラシに続く場合でヨラシがその唯一の例である。

(1)伊麻宇多婆　余良斯（神武記、十一）

(2)阿加良哀登売哀　伊邪佐々婆　余良斯那（応神記、四四）

(3)和我吉奴爾　都伎与良之母与　比多敝登於毛敝婆（十四、三四三五）

(4)安志等比登其等　加多里与良之毛（十四、三四四六）

(1)について古事記伝は

下は善らしにて善かるべきさまに思はると云むがごとし　今の世の俗言に言はゞよさゝうなといふ意なり　良斯は櫻ちる

らし志ぐれふるらしなど常に多くいふ良斯なり（中略）さて若し善らしならばよからしとこそ云べけれ　よらしと云むはいかがなる如くにも聞ゆめれど万葉集に煮らしなどもあればこ言はかくも云つべし（下略）

(2)についても同書は

余良斯那は（旧印本一本などには余の字を爾と作り今は眞福寺本延佳本に依れり）好かるべきさまに思はると云むが如し良斯は志具礼降良斯など常に云良斯にて俗言に某らしきと云言と全同じ（中略）されば余良斯は俗言に好さゝうなといふ意なり

とし、次田潤氏の古事記新講も

(1)善らし　善からむの意

(2)よらしな　宜らしなの意で似合はしい事だの意である

とし、相磯貞三氏の記紀歌謡新解も

(1)今撃たば善らし　唯今直ぐに撃ちたらきつと善いぞの意

(2)好らしな　好いに違ひないよの意

と記伝に従ふが、五十嵐力博士　國歌の胎生及び発達　は次のやうに述べられる。

（前略）同韻の音が二つ続く場合に其の一つを略するといふのは国語法の常で青柳（あをやなぎ）をアヲヤギといひ「搔き鳴（な）らす琴」を「かきなす琴」といひ「吉からし」を「吉（よ）らし」といふやうな無数の例があり（下略）

次に(3)については万葉集古義に

都伎与良之母与は着宜（ツキヨロシ）なり（中略）宜シとは集中に継之宜なども よみあひて打あひ相応したる由なり　さて宜を与良之と云るは　古事記神武天皇條歌に　久夫都々伊　伊斯都都伊母知　伊麻宇多婆余良斯（今対者宜しなり）とあるに同じ

とあるが、万葉集総釈（折口信夫博士）、万葉集東歌の研究、万葉集全釈等はいづれも古義に従つてゐる。万葉集代匠記は

ツキヨラシメヨハ　ツキヨラシメヨナリ。タヘトオモハ、タヘトオモハ、ナリ（中略）我ニ着キ依レト譬フルナリ

と動詞「依る」と見てゐる。又、万葉集全註釈（武田祐吉博士）は

ツキヨラシは動詞着き寄るから転成した形容詞。着き寄つてゐる狀態をいふ。色に染つてゐる。

と形容詞説である。

次に(4)については古義、万葉集新考（井上通泰博士）、全釈は

(3)同様「語り宜し」としてゐる。動詞と見るのでは

与良斯毛ハヨラスモナリ　蘆荻トテアシトヲギトハ似タル蓋ノ生ヒ交ル物ナレバ其如ク妹ト我トヲ他言ニ夫婦ノヤウニ云ヒヨスルナリ　上ニ里人ノコトヨセ妻トヨメルカ如シ

と説く代匠記の説や万葉考の

何れが何れぞことゝひよらんといふなり

とする説があり、総釈や万葉集東歌の研究も「語り寄るらしも」と見てゐる。万葉集論究（松岡靜雄氏）は

かたりよらしも、ヨラシはヨル（寄）の敬語形ヨラスの訛でモは感動詞である。語リ寄ルと用ひた例は他に見えぬがイヒ寄ルと同一用法で寄語の意なることはいふまでもなく　凶と

いふ一言を寄せなさるよといふ意と解せられる。

とする。全註釈は(3)同様に形容詞説で

カタリヨラシモ　語り寄らしもで動詞語り寄るから転成した形容詞カタリヨラシに助詞モの接続したもの　語り寄る状態であるをいふ。他人が悪しと語り寄つてゐるもやうであるの意

とある。右の諸説の中、五十嵐博士のヨカラシのカ略説は従ひ難い。代匠記がツキヨラシメヨと訓むのは根拠がなく、論究の説も同様賛し難い。全註釈の説は語法上難点は無いかに見えるが当時複合動詞が形容詞となつた例がなく、殊に上の動詞の語尾が存するまゝの複合動詞が形容詞に転成するとされる説には疑問がある。次に「寄るらし」の融合とする説はこの説をルの脱落と解するとラ変の場合にはあるが四段の場合には他に例がないので従ひかねるし、(1)(2)には適用出来ない。

新考は(3)について

ツキヨラシは古義に云へる如くツキヨロシの訛なりとされるが訛とは如何なる意味であらうか。ロが東国でラになる例には

須流河乃爾良波（二十、四三四五）

があるが、ヨラシの場合はそのやうな方言的な音韻転訛ではなく、ヨラシといふヨロシと同意味の形容詞が古く存し(3)(4)に於ては方言に、(1)(2)に於ては古歌謡に残つてゐたと見ては如何であらう。かく見ればラシを助動詞とする不合理は解決し、古来の多くの註釈の求めてゐた「良い」といふ意味も自然に出て来るのではあるまいか。

以上ク活の語幹の用法について述べ来つた点を要約すると、大部分の語の用ゐられるA、B、C(1)の用法では連体修飾語的、連用修飾語的及び述語的に用ゐられるが独立した詞としてゞはなく、単語を構成する造語的な要素としての機能をもつものであり、C(2)では於曾だけは体言かとも思はれるが他は感動を表す語幹の特別な用法と見るべきである。D及びEは辞に続くと思はれる場合であり、凡そ助詞、助動詞即ち辞を従へて文節を構成し得ることが自立語としての体言及び用言の特質であるが、Eの助動詞に続くことは否定され、D(1)(a)は副詞と見なければならず、(1)(b)は(2)と共に語幹の特別な用例であり、(3)「ノ」及び「ツ」に連る時は限られた語が限られた助詞にしか接続しないことにより、此等の語幹は自立語としての独立性をもたなかつたと言ふ事が出来よう。

二、所謂シク活形容詞の語幹の用法

初めに所謂シク活形容詞の成立を省みておかう。

A、動詞と関係あるもの（下段が形容詞）

(1)君之目乎保利（四、七六六）――保之伎麻爾麻爾（五、八〇〇）

(2)左備乍將居（四、五七二）――見者左夫思母（一、二九）

都禰比等能　故布等伊敷欲利波（十八、四〇八〇）――伊毛賀故比之久（二十、四四〇七）

物念跡　和備居時二（四、六一八）――立浪之　数和備志

（十二、三〇二六）
於毛比志繁（十九、四一五四）――於母保之吉許等（十七、三九六九）
之多奈夜麻須爾（十八、四〇九四）――奈夜麻思家比登都麻（十四、三五五七）
伎美我久由倍伎己許呂（十四、三三六五）――左宿而久也思母（十四、三五四四）
惠美美惠末須毛（十八、四一〇六）――佐由利能波奈能　惠麻波之伎香母（十八、四〇八六）
(3)爾保比爾米但呂（十五、三七〇四）、目豆兒（十六、三八八〇）、和我梅豆留古羅（允恭紀、六七）、――梅豆羅。古枳駄楼（繼體紀、九九）目頰。四。吾君（三、三七七）米豆良。之。伎。吉美（十八、四〇五〇）

B、副詞と関係あるもの

伎美我美家思志　安夜爾伎保思母（十四、三三五〇）――見礼登毛安夜之（十七、四〇〇三）
人社者　意保爾毛言目（七、一二五二）――於保保思久見子等（十一、二四五〇）

C、名詞等と関係あるもの

宇豆都仁波（五、八〇七）――虚蟬之宇都思情毛（十二、二九六〇）
香之乃菓子（十八、四一一一）――香具波之吉（十八、四一二〇）
比左可多能（十五、三六七二）――美受比左爾指天（十四、三五四七）――伎美我目乎美受比佐奈良婆（十七、三九三四）――和我多妣波　比左思久安良思（十五、三六六七）

こゝでク活成立の例をあげる。

(A)
(1)　囲居而憂吟（五、八九二）――宇礼多伎也志許霍公鳥（十、一五〇七）
安伎良米多麻比（二十、四三六〇）――安伎良気。伎名（二十、四四六六）
彌許許呂遠　斯豆米多麻布刀（五、八一三）――　爾波母之頭気。師（三、三八八）
(2)美也波安礼爾家里（二十、四五〇六）――安良伎之麻禰（十五、三六八八）
眞日久礼氏（十四、三四六一）――可具呂伎可美（十五、三六四九）
(3)望者多要奴（八、一五二〇）――結手懈毛（十二、三一八三）

(B)
佐夜爾（十四、三四〇二）――佐夜気吉見都都（二十、四四六八）
之気爾（十八、四〇五一）――繁道森径之気久登毛（十六、三八八一）
由多爾（十二、二八六七）――海原乃由多気伎見都々（二十、四三六二）

(C)
於曾能風流士（二、一二六）、於曾波夜母（十四、三四九三）――心鈍手向為在（十二、二八五六）

等保能美可等（十八、四一一三）、等保追可牟於夜（十八、四〇九六）、伊也等保爾（二十、九三九八）――等保伎美与（二十、四三六〇）

右のやうにク活シク活の成立を比較する時それ〴〵対応する語群がある。差異ある点はA(1)の場合で、共通の語幹に動詞と形容詞の語尾がついてゐるが、A(1)の場合には動詞の語幹に乙類のケがついて形容詞の語尾がつく事である。これは動詞の語幹に形容詞的意味の表現力が乏しいので接尾語ケをとつたのであらう。

次に所謂シク活形容詞の語幹の用法を見よう。

A、連体修飾語的に使はれる例（(イ)シを伴ふ (ロ)シ伴をはず）

(イ)宇都久之波波（二十、四三九二）宇都之眞子（十九、四一一六）於奈自許等（十五、三七七三）於夜自麻久良（十四、三四六四）香久波之君（十八、四一二〇）可奈思伊母（十四、三四八六）麻具波思児呂（十四、三四二四）波之嬬（八、一五二一）見我保之君（十九、四一七〇）

(ロ)安多良佐可里乎（二十、四三一八）牟奈許等（二十、四四六五）

B、連用修飾語的に使はれる例

(イ)用例がない

(ロ)伊多那加婆（記、八四）登保志呂之（三、三二四）波也美武（十五、三七二〇）布刀之利多弖氐（二十、四四六五）多迦比迦流比能美古（記、二九）

C、述語として使はれる例

(イ)妻子美礼婆　米具斯宇都久志（五、八〇〇）京師乎母此間毛於夜自等（十八、四一五四）伊毛之安夜爾可奈之毛（十四、三四七九）

右の中、A(ロ)のアタラは感動詞的な語であらう。ムナについては、山田孝雄博士　藝林一ノ六　むなくるま考　が言はれるやうに、ムナを語幹とした時代とムナシを語幹にした時代が考へられる。

こゝにシク活の語幹はシを含めたものか否か、即ちシは語幹か語尾かの問題が生ずる。こゝでク活の用法に於てふれなかつた用例と、シク活の用例の二三を補足する。

ク活　接尾語のつく例

許已乎之母　安夜爾多敷刀美（十八、四〇九四）

栄流今日之安夜爾貴左（十九、四二五五）

安加良多知婆奈（十八、四〇六〇）

ク活の終止形と同形ではあるが、連体的に使はれる例

蚊黒為髪尼（十六、三七九一）安良之乎之（二十、四四七〇）馬下乃阿部橋（十一、二七五〇）

（この場合はク活語幹がシク活語幹との混淆 contamination によつてシをとつたものと解する。）

カリ活の例

故非之久能　於保加流和礼波（二十、四四七五）

シク活　接尾語のつく例

使乃家礼婆宇礼之美登（十七、三九五七）

伊母賀加奈志作（二十、四三九一）

賢良乎為跡（三、三四四）
卯管庭（十三、三二八〇）

カリ活の例

伊麻久須理師　多布止可理家利　米太志可利雑利（仏足跡歌碑）

以上にあげた諸例からク活シク活の語幹の用法を比較すると、ク活の語幹とシク活の語根（シク活のシを除いた部分）の共通する機能としては、

(1)連体的用法の時、どちらもツをとる事がある。

(2)連用的用法の時、どちらもニをとる事がある。

の二点が考へられるが(1)(2)ともシク活の場合の用例は極めて乏しい。

これに反して、ク活の語幹と、シク活のシを語幹に含めた形の共通する機能としては、どちらも

(1)連体的用法がほとんど絶対的に行はれる。

(2)接尾語ミ、サ、ラに接続するのは、この形からである。

(3)カリ活になる時、この形からカリに続く。

右によつてシク活のシは機能の上からは語根に接続して語幹を構成する要素と言ひ得られると思ふ。於奈自（十五、三七七三）於夜自（十七、三九七八）等伎自久（十八、四一一一）の諸例がシを連濁にしてゐるのもシの語幹としての緊密な一体感を示してゐるのであると思ふ。

さてシク活のシを語幹であるとして論じた権田直助の説（形容詞八衢）に対し、語尾であるとする論者は少くない。例へば小林好日博士（日本文法史）は

（前略）然し氏（筆者註、権田直助をさす）のいふやうに、空烟（ナナシ）といふのもあり、又、

いせのうみの渚によるうつせ貝むなしたのみに世をつくしつゝ（古今六帖）

のやうに「むなし」から熟語になることは確かにあるが、

おほろかに心おもひてむなごともおやの名立つな（万二〇）（中略）

など、「むな」から熟語になる例も少くない。「恋ひし」「厭はし」「急がし」など「恋ひ」「厭は」「急が」は動詞の未然形である。「未だし」「甚だし」の「未だ」「甚だ」は副詞である。「かなし」は感動助詞の「カナ」と同源のものを語幹として、それに「し」のついたものである。「大人し」「男々し」「女女し」等の「し」が語幹に属しないことはいふまでもない。これによつても、志久活用の「し」が久活用の「し」と同じく語尾であることを思はしめるものがある。

とされる。しかし、右にあげられた例は博士の説とは逆に、シがついて始めて形容的表現力を得て語幹が構成される事実を示すものではあるまいか。更に博士は

志久活用の形容詞が、語尾の「し」と共に、「み」「さ」「げ」等の接尾語に接し、又は名詞と熟語になるのに、久活

用の形容詞が「し」なくして、接尾語と接し名詞と熟語になるのは何故であるか。

これは形容詞にも発達の前後新古の差別があつたと考へなければならぬだらう。

とされるが、こゝには発生論と機能論の混乱が見られる。

もつとも権田説が「嬉しい」は「嬉しし」の音便とするのは小林博士も指摘された通り誤解である。

以上述べ来つたところで所謂シク活用の語幹の用法はほゞ明かになつたと思ふが、要説すると次のやうになる。

(一) 連体修飾語的に用ゐられる。この時自立の体言としてゞないことは、阿賀波斯豆麻（仁徳記、六〇）に見られるやうに次に来る語が連濁になつてゐる事で証される。

(二) 接尾語ミ、サ、ラをとつて詞となり、その詞は体言としての機能を備へる。

(三) 零記号の語尾をとつて終止形として用ゐられる。その時助詞モ、トがつくこともある。

尚シク活の終止形について、浜田敦氏古代日本語は

発生的に見れば「シク」活用の形容詞がもと語根の終に「シ」のあつたものであり、後に失はれたか、或ははじめからさうであつたかは今日知るよしもないが、「シ」の音が二つ重なる為にその一つが脱落したものには違ひないのである。

とされる。「シシ」の用例が当時無い以上、終止形には初めからシ語尾がつかなかつたのか、ついたのが脱落したかは明らかでない。語幹の形ではあるが終止形であるから、こゝでは仮りに零記号の終止形語尾としておく。

三、結語

以上古代形容詞の語幹の用法を見て来たが、最後に一二の学説にふれつゝ私見を述べてこの論を結びたい。

上田万年博士形容詞考國語のため第二は形容詞の成立を形態学上四期に分けられた。大要は

一、語根が単純に用ゐられる場合

二、形容詞に一種のまがりを生じ、文字には「し」と書かれて居るがchのフォームである場合

三、甲、き・し
乙、し・しき　とまがりをとりし場合

四、鎌倉時代以後のまがりが漸々なくなりし時代

とされ、以後の形容詞の論者は最近の宇野正邦氏の上代形容詞考説林二巻六号八号に至るまで、多くこの第一期の語幹時代を想定される。上田博士は例として

夜さむ、遠浅、あやにく、あちきな

をあげられたが此等は何れも用言的に使はれてをり、安藤正次教授古代國語の研究を初めとして一般にはこの語幹は、用言としての叙述性と自立性とをもつたものと解されてゐる。しかし以上見て来たやうに

A、連体修飾の場合は、安可胡麻と連濁になつて複合するか、等保能美可等、等保追可牟於夜のやうに助詞をとる。

B、連用修飾の場合は、伊也等保爾。伊多母。為便無見のやうに助詞をとる。

C、述語の場合は、加座。皤夜能と音韻変化する。

故に語幹時代を想定するにしてもそれは品詞としては独立性に乏しく、形容的意味をもつた造語要素もしくはノ、ッをとる準体言であつて、用言的な叙述力は持たなかつたと思はれる。この語幹が活用語尾をとつて始めて自立語として文節を作る用言となるのである。即ち語幹がそのまゝ用言としての機能を持つたとは思はれない。（なほ、このことは形容詞の語尾が直ちに辞、即ち助動詞ではないことを示してゐるともいへよう。）

次に上田博士は第二期に「一種のまがり」としての「シ」がついたとし、その remnant の例として、

とほとほし　こしのくにゝ
さかし女を　ありときかして
くはし女を　ありときこして
見かほし君が　馬のあとぞする
なか〳〵し夜を　ひとりかもねむ

をあげられた。しかしこれらは私見によれば何れもシク活語幹の複合的用法である。しかもク活語幹の用法は前述の通りであるから、ク活も含めた全ての形容詞の語幹に「シ」のついた時代があつたとするのは無理ではないかと思ふ。

（昭和二六・五・二〇）